

2月8日は、亡き子(二女真理子)の誕生日です。26年前に交通事故により26歳で突然亡くなりました。生きていれば、47歳になり、ます。事故に遭つ少し前のこと。成人式の日、記念撮影するため、娘が振り袖を着て正座をしている姿を見ました。その際、私は思わず息をのんだことをよく覚えています。なぜなら、父親の欲目を抜きにしても、まばゆいほどに美しく、この世を超えた存在のように感じられたのです。仏教では、人が死んでゆく先として「浄土」という世界が説かれていきます。今振り返れば、あの美しきは、浄土へ向かう兆しであつたのかもしれません。その年の12月26日、娘は突然、浄土へ旅立っていきましました。

# 教えの庭から

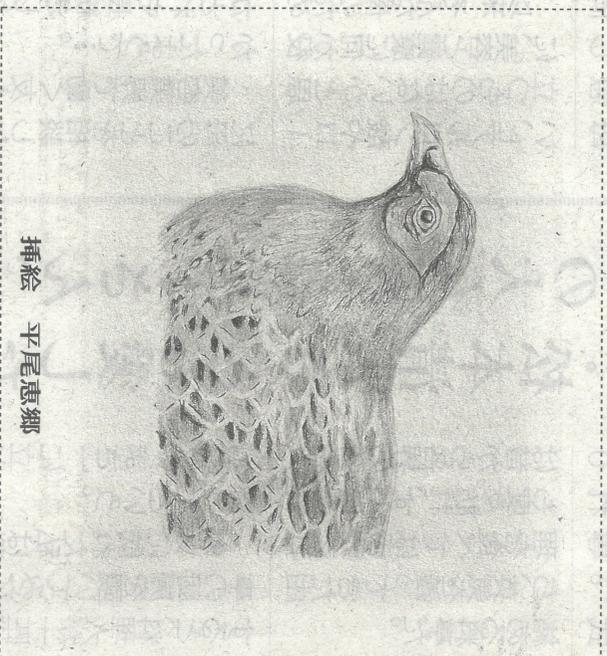
## 浄土からの願い

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

娘は交通事故に遭つたことを、どれほど無念に思つたことでしょうか。そして今も、「いつか皆さん交通事故にじみ出てきているの故には遭わないうちに」と願っているに違ひありません。言つてもいいですが、私には

ん。この願いを形にしたいと思ひ、寺の境内に「交通

安全観音」を建立しました。また、私は、34年前に父の胸の中に帰ってきます。た。父母もまた、私にさまざま「魂が帰ってきている」とごまか願いを残してくれま



挿絵 平尾恵郷

した。朝、お経をあげている。娘の「お父さん、今心にあふれてきたのでしょ。また、行基菩薩ゆかりの歌として、「ほろほろとさやきかけてくれるので、私が悲しいときには、彼らの悲しむ声が聞こえ、父が鳥の声となって、行基菩薩の心の中に現象して、私に聞こえます。そのた、行基菩薩は、亡き父母のために、私は亡き人々とともに生きていくのだと気付かされたことと思います。私たちの住むこの世に

この世には、先に亡くなつた人々の願いが満ち溢れ、浄土におられる人々の願いが溢れ溢れていると思われ、浄土からの願いといた時に亡き人を想ひ、鳥の声を聞いた時に亡き人を想ひ、亡き人たちが風になつたり、鳥の声になつたりして、私たちの心の中に現れてきます。これらのことを念じて、「父母のしきり」を念じて、34年前に父の胸の中に帰ってきます。た。父母もまた、私にさまざま「魂が帰ってきている」とごまか願いを残してくれま

です。が、雉の声を聞くたびに、春の野に響く鋭く孤独な声を継続するための大切な勤めとなります。